

エリザベス・ギャスケル作

「リビー・マーシュの三つの祭日」

松岡光治訳

第一の祭日 聖ヴァレンタイン祭

一 昨年十一月のことである。私たちの近所で引越のようなのがあったが、それはどう見ても引越とは言えなかった。たった一人の少女がある場所から別の場所へ住まいを移しただけなのだから。引越と言えば、たんす、籠、ドレッサー食器台、ベッドを荷馬車いっぱい積み込み、天辺には大きな古時計をくくりつけるのが普通だが、今回は木製の収納箱がたった一個だけ、娘のあとから運ばれていたにすぎなかった。娘の方は肉体的にとりよりは精神的に元気がなく、ものうげに、ゆっくりと重い足取りで通りを歩いていた。この娘の名前はリビー・マーシュ。今まで一緒に住んでいた知り合いたちがマンチェスターを離れることになり、彼女もディーン通り(一)の下宿を出て行かざるを得なくなったのである。

彼女は、今度の下宿が街中からかなり離れていて、しかも大家さん夫婦が立派な人らしいというので、自分は幸運なのだと思うように努めていた。事実、満足しようと努めたのだが、そうした理性的な判断にもかかわらず、いつもの心細い感じに襲われた。またしても、まったくの赤の他人の中へ、今まさに放り込まれようとしていたからである。

アルベマール通り(三)×横丁二番地にやっと到着した。リビーはゆっくりと歩いてきたのだが、収納箱を運んでくれた男と別れる地点に近づくと、その歩調がさらにゆるまった。というのは、この男は知り合ったばかりであったが、家の開いたドアから顔を出して、「ディクソン家の新しい下宿人」はあい、つに違いないと思っっている横丁の連中に比べれば、赤の他人とは言えなかったからだ。

ディクソンの家は横丁の左側の奥にあり、真向かいの家とは出入り口のない、高いレンガの壁でつながっている。横丁の住居はすべて同じ単調な建築様式。片方の家が反対側にある瓜二つのもう片方の家と向き合っている様子は、まるで鏡に映った自分の姿を見ているかのようであった。

ディクソンの家は閉まっけていて、鍵は隣の家に預けられていた。鍵を預かっている隣の女は、リビーが来るのを知っていたよ、うで、応対に出て少し説明してからドアを開けてやり、炬格子で活気なく燃えていた鈍い灰色の石炭殻をかき立てると、さっさと自分の家へ戻ってしまった。可哀想に、独りぼつねんとリビーはあとに残され、居間の床の中央には例の収納箱が置いてあるだけだった。止めどなく流れる涙を抑えるのに役立つような言葉で——このように単調な静けさよりはましな、ありきたりの言葉でさえ——かけてくれる人間は、そこには誰もいなかった。

ディクソン夫妻とその長女は工場で働いていて、昼間はずっと家にいなかった。下の子供はこれまた女の子だ。まだ幼かったので、平日は家のドアの鍵と一緒に隣の家に預けられ、食事をさせてもらっていた。この子は、リビーがやって来たとき、横丁の入口付近でせつせと泥の饅頭を作って遊んでいたが、両親の新しい下宿人に関心を持つにはまだ幼すぎたようだ。この子の姉と同じ表側の部屋で一緒に寝起きすることは、あらかじめリビーにも分

かっていた。しかしながら、梯子はしこのような急階段を昇って二階へ案内してくれる人間は誰も家にはいない。それで、想像にかたくないことだが、自分で二階へ行つて外套を脱ぐのは、厚かましいように思えた。仕方なく婦人帽を脱いでから座り、やっと炎を出して燃え始めていた暖炉の火を見つめていると、悲しい過去のひと、そしてこの広い世界で自分が天涯孤独の身になったことしか考えられなくなった。父と母はすでに亡くなっていた。弟もずいぶん前に死んでいる。今も生きておれば、弟はもう十九になっているはずだ。とはいえ、彼女が弟のことを考える時はいつも、美しい赤ちゃんとしてだけである。リビーの唯一の友だちは——友だちと呼ぶことができればの話だが——今では遠く離れた別の家に住んでいる。雇い主たちも彼らなりに親切ではあるが、この気ぜわしい社会の中で右往左往しながら働くのに忙しすぎて、化粧着を裏返してリフォームさせたり、カーペットの修繕をさせたり、家庭用のリンネル類の繕いをさせたい時を除いて、お針子の少女のことなどを考えてやる余裕もなかった。それで、リビーはいつか将来は自分自身も愛し愛され、女にとって一番大切な務めを果たせる家庭が持てるという明るい未来像ヴィジヨンで元氣の出るような——若い娘が心の中に秘めているような——自然な気持ちでさえ、ほとんど持てなくなっていた。

リビーはとても器量が悪かった。そのことは昔から自覚してい

たので、それで屈辱を感じるようなことはなくなっていた。彼女のようにマンチエスターに住んでいる人間は、多少は自分の容姿について意識せざるを得なかった。実際に、工場で働いている若者たちは、容姿についての関心が非常に高い。仕事が終わる時刻に工場からどっと溢れ出てくる連中を見れば、間違いなく、真実味のある話をたくさん聞くことができるだろう。その中には、失礼ながらも面白おかしい意図を兼ね備えたものがあり、たとえ自分に対する冗談であつても、笑いを禁じ得ないほどだ。リビーがしばしば浴びせられた質問は——「ずいぶん昔は美人だったなんて抜かすんじゃないあるめえな？」とか、「おめえの役目は、日がない一日、畑の真ん中で鳥を脅して追い払うこつちやねえのか？」とかいったものだったので、自分の容貌のことで何か未練がましい感情を抱くこともなくなっていた。

このようにリビーが空想によつて様々な場面を思い起こしながら、考え込んで静かに泣いていると、ディクソン家の人たちが不意に帰宅した。わなわなと唇を震わせて頬を涙で濡らしていた彼女は驚いてしまった。

リビーは、一時間前まで自分に重苦しい感じを与えていた、あの静寂を取り戻したい気になりかけた。ディクソン家の人たちは話すのも笑うのも大声で、することなすこと全部が大騒ぎだったからである。ディクソンはリビーの収納箱に付いていた鉄の取っ

手を握り、彼女が二階へ運ぶのを手伝ってくれた。娘のアンも荷ほどきを見ようと続いて二階にやって来た。「お針子さんが持つてる」衣裳がどんなものか知りたい様子だった。ディクソン夫人はガチャガチャと音を立てながら茶道具を出して、薬缶を火にかけた。下の娘も隣の家から戻ってきたので、さらに騒がしくなった。それから、夫人はアンを階下へ呼び、あれこれと食べ物を買に行かせた。とても水っぽいクリームに加える卵とか、バター付きパンに風味を添えるハムとか、（買うことができればの話だが）焼きたての新しいパンとかである。リビーは、これらの命令をディクソン夫人が声を十分に高めて発しているのを聞き、この前まで自分が下宿していた家の食習慣と雲泥の差がある彼らの贅沢ぶりに驚いた。しかし、彼らは熟練した紡績工で、賃金をしっかりともらっていたし、華氏七十五度から八十度にもなる環境の中に昼間ずっと閉じ込められているのだ。質素な食事に対する自然で健全な欲求を完全になくしてしまい、食事以上に高尚な趣味もなかったたので、そうした贅沢な食事に最高の喜びを見出していたのである。

ティーの準備ができると、リビーは階下へ呼ばれ、一緒に食事をしないかという（荒っぽい）心のこもった招待を受けた。彼女が押し黙って茶卓の片隅に座っていると、ディクソン家の人々は自分たちだけで会話を続けていた。その内容や言及される人々

についてはチンブンカンブンだったので、とうとうリビーは勇気を出してローソクを所望し、就寝前に荷ほどきを済ませに行った。明日からは数日間連続して縫い物の仕事に出かけねばならないのだ。しかし、比較的静かな自分の部屋へ移ると、急に元気が出なくなったので、ノアの箱船^(四)のような収納箱に錠前をかけるだけで満足した。そして、ローソクを消して窓辺に座り、明るい夜空をじつと眺めた。「すべてを包む蒼穹」^(五)は、その深奥を星がゆつくりと絶え間なく進んで行く荘嚴な時刻に、悲哀に満ちた人々に対して憐れみの光を注いでくれた。

やがて、視線を下に向けたリビーは、横丁の路地をはさんで彼女の部屋の窓と対面している真向かいの部屋の窓を凝視した。部屋には明かりがともつていて、ブラインドが下ろされている。彼女が何気なくブラインドに目をやると、最初その上に見えたのは絶えず難儀そうに動いている幽霊のような小さい影であった。それは子供の手と腕——以外の何物でもない。その腕が鈍痛の大きな波動と拍子を合わせるかのように上下運動している間は、手首から長い指がだらりと垂れているのが見えた。一刻も早く眠り込んで、あの絶え間ない、弱々しい動きが静まればいいのにと、彼女は思わずいられなかった。すると実際に、少年が疲労困憊して眠りに陥ったみたいに、腕の動きが時おり止まった。だが、ほどなくすると、突発的な激痛が走ったかのように、指を握りし

めた子供の手はぐいと持ち上げられた。大家の娘のアンが寢床にやって来たとき、リビーはまだベッドに座ったままで、向かい側のブラインドの影を見つめていた。すぐに彼女は「あれは誰の影なの？」とアンに尋ねた。

「マーガレット・ホールの息子じゃない？ 去年の夏だったかな、とっても暑くて我慢できなかったんで、夜になっても窓を閉めなかったの。あつちの窓も開いとつたんで、あの子のうめき声が何度も聞こえてきてね。あたし、目を覚ましちゃった。寒い季節になつてから、ちよつとよくなったみたいだけど」

「いつもベッドに寝てるの？ 何の病気がしら？」と、リビーは尋ねた。

「背骨がちよつと悪いって、みんなそう言つとるわ。なんだか、いい時もそうじゃない時もあるみたい。あの子はホントにいい子だし、母親の方もそんなに悪い人じゃないんだけど、ただ、あたしの母さんとあの子の母親が喧嘩しちゃってね。それで、今じゃ互いに口をきいとらんの、あたしたち」

リビーはずつと見つめていた。彼女がやつと口を開いて、あの子の母親はどんな人かしらと尋ねた時には、アン・デイクソンはすでに熟睡していた。

それから月日が経過し、いつものように秘密のヴェールがはがされた。リビーに分かったのは、マーガレット・ホールは未亡人

で洗濯女として生計を立てているということ、あの重苦にあえぐ少年は彼女が溺愛している一人っ子だということであった。この母親は息子以外のほとんど全員を誰彼の見境なく叱りつける癖があったので、この界限かいわいではガミガミ女という評判が立つようになったそうだ。しかしながら、彼女が息子に対して非常に優しく情け深かったことは事実である。母親が生計のために外で骨折って働いている昼の間ずっと、息子は独りで小さなベッドに横たわっていた。リビーは、仕事のために外出する必要がなくて下宿で簡単な仕事をする時はいつも、自分の部屋の窓から外を眺めていた。二つの物言わぬ影が向かい側のブラインドに映って動く、帰宅した母親が息子の上に身をかがめたり、枕を直してやりたり、姿勢を変えてやったり、夜の紅茶を入れてやったりするのが分かるのではないかと、リビーは思ったものである。そして、夜中になっても頻繁に、リビーはベッドからそっと起き上がり、彼が痛みで眠れない時によくしていたように、今夜も小さな腕を上下に振っているのではないかと思つて、確認せずにはおれなかつた。

その年の冬は家でできる針仕事がたくさんあつた。指がかじかむほど寒くない時は、時たま（あまりないが）休憩する際に、リビーは少年の姿を見ようと針仕事をいつも二階へ持つて行つた。彼は、具合のよい日には、体を起こして窓の外を眺めることがで

きたし、リビーも彼が自分の姿を見たがっているのに気づいていてた。やがて彼女は路地をはさんだ向かいの少年に勇気を出して、額うでいてみせた。すると、少年はかすかに笑つて、すぐに頷き返してきたので、この行為をどうやら喜んでいららしいことが分かつた。もし恐ろしい母親の存在がなかつたなら、この微笑に励まされてリビーはさらに話をする間柄へと進んでいただろう。しかし、彼女がデイクソン家の下宿人であるということは、彼の母親にとつて十分に胸糞が悪いことだつた。彼の母親は、鉢合わせした時はいつでも相手に当てつけを言つたり、何か悪口を言う機会はないものかと待ち伏せしている——そうしたことが見え見えの生活を送っていたのである。

リビーは、少年に絶え間なく関心を抱いているうちに、彼には夢中になれるものが全然ないということに気づいた。つまり、長い昼の間ずっと独りでいる時に、耐えがたい痛みから注意をそらすことのできるものがなかつたのだ。彼は花が大好きだつた。リビーが今の下宿に引っ越してきた時は十一月だつたが、とても穏やかな気候だつたので、花が少し庭にまだ残っていた。田舎の人たちは、そんな花を集めて花束を作り、市いちのたつ日にマンチェスターへ売りに来ていた。リビーが隣人になつた、まさにその日に彼の母親はミカエル祭の花デイズの束を息子のために買つていたので、その花束の推移を彼女は注意深く見守っていた。まず、彼は

口が壊れて蓋ふたのなくなった古い急須に花をさし、熱が出た際の喉の渴きをいやすために母親が彼のそばに置いてくれた水差しを使つて、毎日その急須に水を補充していた。やがて、ライラック色の星座のような花束が少しずつ色あせるようになり、それまで彼が愛撫せんばかりに見とれて過こしていた時間は、花束の美しさを損なっている枯れた花を切り取ることに費やされるようになった。ハサミは古くて扱いにくく、彼の弱々しい動きも遅々としていたので、しおれてしまった大切な花を切つて整えるのに午前中の半分がつぶれてしまった。それでとうとう彼は残つた数少ない花を押し花として保存した方がよからうと考えたようである。花は古い聖書のページの間に慎重にはさまれた。それからというものの、この重い本を持ち上げることができるほど体調のよい日はいつも、彼は押し花のページを開いて、まるで友だちのように眺めていたものだった。なぜかと言うと、冬の間は育てたくても育てる生花がなかったからである。

リビーが思案に暮れていると、ある考えがパツと頭にひらめいた。その後は、せっせと針を動かしていても、顔には嬉しそうな忍び笑いがたびたび浮かび、彼女はそのことで淋しい冬の間もずっと元気つけられた。デイクソン家の人たちは親切だったけれども、その考えがひらめくまで、彼女は実際ずっと淋しい冬を過ごしていたのだ。もつとも、針仕事がほとんどない週でも、彼ら

は家賃の支払いを決して強要しなかったし、下宿で針仕事をする場合を考えて事前に取り決めていた家賃の支払いが少ないからと言つて、彼らが豪華な食事を洪あふつて彼女にとらせないこともなかった。それは他のどこの下宿でも絶対に経験できないような贅ぜい沢な食事である。彼らは紅茶にラム酒ラムを入れて飲むことを教えてくれ、「大丈夫、そんなもんは無料たで結構」と言つてくれたものだ。しかし、彼らはとても気ぜわしく、羽振りもよく、自身のことばかりに心を奪われていたので、リビーの孤独感を取り除いてやることができなかつた。まだ彼女が言葉を交わしたこともない例の少年の（昼はその小さな顔の、夜はその影の）半分も取り除けなかつたのである。

リビーにひらめいた考えは次のようなものだった。彼女の母は西イングランドの出身で、おそらく読者の皆さんが御存じのように、そこでは聖ヴァレンタインの祭日セントにプレゼントを贈る素敵な習慣がある。送り主の名は伏せるのが通例だが、プレゼントの楽しみの半分は、もちろん、そうした謎めいたところにある。それに、二月十四日はリビーの誕生日でもあった。リビーが幸せだった頃は毎年、彼女の母は何らかのプレゼントをして娘が一驚を喫するのを喜んでた。毎年そのヴァレンタインの贈り物が届けられる方法は異なっていたものの、送り主が誰であるかについては、大体のところリビーには分かっていた。それ以来、幸福

だった過去の記憶として彼女の脳裏に焼きついて離れないという理由で、二月十四日は一年で一番大切な日となった。しかし、今年には彼女自身たとえ昔のように楽しい気分になれなくても、他人の生活を明るくものにしてあげたいという気持ちになった。金を貯めるのに爪に火をともしような生活になっても、何の喜びもなく苦しいだけの単調な生活を送っている向かいの可哀想な少年のために、カナリヤと鳥籠を買ってあげようと思ったのである。

リビーの不安や恐怖、希望や数々の自己犠牲——おそらく寡婦の賽銭さいぜん（九）としては有形の価値がほとんどないけれど、それでもなお（絶えず私たちの間を漂っている）姿が見えない天使たちがちゃんと注目してくれて、目的を達成するまで生活に変化を与えてくれる行為——の全部を、今ここで読者諸氏に話してもよいだろう。彼女の目的は達成されたと言ってよい。まさに聖ヴァレンタインの祭日の前の日、彼女は時間を見つけて、アルベマール通りの近くに住んでいて鳴き鳥の仕入れで有名な散髪屋のところへ、半ギニー（二〇）を持って行った。ありとあらゆることには、その善悪にかかわらず、マニアがいるものである。マンチェスターの織工には、簡単に信じることができないほど鳥について詳しく、関心も非常に高い者が多かった。たいていの話題については頑固で、無口で、打ち解けない男たちであっても、彼らの顔をパツと明るくさせるには、そうした鳥の話題に触れさえすればよ

い。そうすれば、最近のカナリヤの品評会で誰が一等賞を獲得したか、その優勝した鳥を見るにはどこへ行けばよいか、すぐに彼らは教えてくれるだろう。また、お偉方の家畜の品評会を真似したような、滑稽だけれど、かわいらしくて面白い鳥の品評会の詳細について、すべて話してくれるだろう。そんな鳥の愛好家たちの中でも、散髪屋のエマニュエル・モリスは第一人者と目されていた。

彼はリビーを奥の小さな部屋へ案内した。そこは、ヒゲをそる時に石鹼せっけんの泡で飾り立てられた壮観な自分の顔を店先で人目にさらしたくない、そういった内気な男専用の部屋であった。この部屋の四方には小枝で作った粗末な鳥籠が幾つも吊り下げている。とはいえ、一等賞をとった鳥だけは例外で、金メッキした針金製の鳥籠の栄に浴していた。外見上の美しさに関するかぎり、鳥の姿形が長くて細ければ、それだけ多くの賞賛を浴びた。これに加え、羽毛の色が濃くて澄んでおり、鳴き声が力強く変化に富んでいる場合、その鳥の技能についてのエマニュエルの説明は、それだけ余計に詳しくなった。しかしながら、これらはすべて賞を獲得した鳥の場合である。質問したあと、そうした鳥たちの値段が一ギニーから二ギニーだと聞かされたリビーは、少し気落ちしてしまった。

「形や色については、あだし、あんまりう、さ、い、人間じゃあり

「ません」と彼女は言った。「鳴き声のいい鳥がほしい——それだけなんです！」

彼女に対するエマニユエルの評価が少しばかり下がった。彼は鳴き声のいい鳥を幾つか見せてくれたが、それもリビーの手持ちの金では買えなかった。

「やっぱり、あたし、大きな声で鳴く鳥は、あんまり好きじゃありません。だって、うるさいだけですし、うるさいとイライラする人たちが時にはいますからね」

「鳥の鳴き声なんぞでびびるような、そんな野郎は腰抜けに決まってる」

エマニユエルはかなり屈辱を感じている様子であった。

「体の弱い人にあげたいんです」と、リビーは申し訳なさそうに言った。

「そうじゃな」と答えた彼の口調は、その問題を熟考しているかのように聞こえた。「病弱な連中が、才能のある賢い奴よりか、愛情を示してくれる奴の方を好きになるってのは、よくある話じゃ。ひよつとすると、お前さんには、こっちの奴がいいかもしれねえな」と彼は言いながら、ある鳥籠の扉を開けて、片隅で、よんぼりしていた単調な色の鳥を呼んだ。「おい——ジュピター、(二)ジュピター！」

ジュピターはすぐさま羽をなでつけ、小さな喜びの鳴き声を発

しながら、エマニユエルの方へ飛んできた。そして、まるでキスをするかのように、くちばしを彼の唇にあててから、彼の頭の上にとまり、嬉しそうにグルグルさえずり始めた。他の鳥たちのさえずりに比べれば、変化に富んだところや澄んだところは全然なかったが、この鳥の方がリビーには気に入ったようだった。というのは、いつも彼女は手の届かないブドウ(三)よりも手に入るグズベリーの方がよいと思うような、そんな人間だったからである。価格も適正だったので、彼女はその鳥籠を喜んで受け取り、家へ持って帰るのに備えて外套の下に隠した。その間、エマニユエルは専門馬鹿ということもあつてか、鳥のエサについて事細かく指示を与えていた。

「すぐに誰でも分かってくれるようになるかしら？」と彼女は尋ねた。

「二日だけ待つてみな。そうすりゃ、こいつとお前さんは今の俺たちみてえにし、く、り、行かあね。お前さんは扉を開けて、こいつを呼びさえすりゃええんじや。そうすりゃ、お前さんを追つかけて部屋中ぐるぐる飛びまわらあね。じゃが、こいつは最初にキスをしてから、そのあと頭の上にとまるからな。俺は時間がなくてできんけど、その他にもいろんな芸をさせたりゃ、仕込んでやりゃええんじや」

「この子の名前は何ですか？　ちゃんと聞き取れなかったんで

すが」

「ジュピターじゃよ。珍しい名前じゃが、この町にや、ボビーやらデイキーやらがわんざといてるんでな。それに、俺んとこの鳥たちはちよつと変わりもんみてえに思われとるんで、ましな名前をつけたいんじゃない。そんなわけで、せがれの学校の教科書から名前を幾つか選んだんじゃないよ。ジュピターの名前で呼ぶたって、慣れちまえば、そんなこたあデイキーと同じくれえ朝飯前じゃねえか」

今まさに店を出ようとしていたリビーは、「ピーター(ニミ)って呼ぶ方が、あたしには発音しやすいんですが。ピーターでも反応してくれますよね？」と尋ねた。

「ひよつとするとな。じゃが、三音節の名前の方が、すぐ反応するじゃろうな」

聖ヴァレンタインの祭日に、ジュピターの鳥籠はぐるりとツタの葉っぱで飾られ、まるで小枝細工の籠に置かれた実にかわいい花冠のように見えた。その葉っぱの一枚には細長い紙がピンで留められていて、次のような言葉がリビーの円形書体で上手に書かれていた――

あなたの誠実な聖ヴァレンタインの恋人より。この子の名前がピーターであることに御注意あれ。しばらくその名で呼べば、反応して

くれますよ。

しかし、その日の午後、リビーは針仕事をほとんどしなかった。プレゼントを彼女の聖ヴァレンタインの恋人のところまで運び、カナリヤを手渡して受取人が誰かを説明するや否や走り去ることになっていた、その使いの者が現れるのを今か今かと待つのに余念がなかったからである。

とうとう使いの者がやって来た。それから、下宿の雑役婦がカナリヤを二階へ持って上がるまで、しばらく間^まがあった。やがて、小さな顔がパツと輝いて明るく紅潮し、喜びと好奇心のあまり弱々しい手がぶるぶると震え、添え書きの内容を理解しようとして(可哀想に、文字を読むことはできなかったが)頭を下げるのがリビーには見えた。あらゆる角度からカナリヤを、つまり、頭、尻尾、翼、足を見るために、少年は有頂天になって鳥籠をぐるぐると回っていた。だが、ジュピターは再び知らない人たちの間に身を置いた不安からか、そんな少年の目的になかなか協力してくれなかった。なぜなら、ジュピターは絶えず少年の正面へ自分の顔を向けようと、びよんびよん跳びまわっていたからだ。これは少年を決して飽きさせない喜びの源泉となり、知らぬ間に日が暮れてしまった。宝物を所有したことに対する嬉しさのあまり、彼は誰の贈り物だろうかと考えることを明らかに忘れてしまったよ

うである。鳥を見せてもらった母親の暗い影がブラインドに映ったかと思うと、彼女が愛情のかぎりを尽くして、リビーの頭には浮かんだことがないようなことをしてやっているのが——体を曲げてキスをし、親として子供と一緒に喜びを分かち合っているのが——見えた。

夜の間、カナリヤは小さなベッドと窓の間に置かれていた。リビーがいつものようにチラッと見るために起き上がると、眠っている時でさえ新しい宝物を抱きしめているかのように、彼が大好きな鳥の入った籠を小さな腕で抱えている姿が見えた。この最初の晩に、ジュピター自身の寝つきがどうであったか、それはまた別問題である。

このようにして最後の年におけるリビーの三つの祭日の第一日目が終わった。

第二の祭日 聖霊降臨祭

アルベマール通り×横丁二番地では、早朝の五時でさえ、過去何年もの六月の真昼と同じように、この上なく強烈で明るい陽光が降り注いでいた。

横丁の路地は人の声や笑いで明るく活気を呈しているように見えた。寝室の窓は広く開け放たれ、熱気のために夜もずっとそう

されていた。時にはシャツ姿の男が頭と両肩を窓からひよいと出しているのを目にするかもしれないし、時には次のような質問が一方からもう一方へ発せられるのを耳にするかもしれない。

「ところで、ジャック、おめえはどこへ行くんじゃね？」

「ダナム(二四)さ！」

「へえ、古くせえ奴だな、おめえも。おめえの爺さんも、昔はダナムへ行つてたじゃねえか。じゃが、そういや、おめえは万事旧式な男じゃったな。俺はオールダリー(二五)に行くぞ——カミさんと一緒にな」

「ああ、そいつは、おめえ、カミさんしかおらんからじゃよ。ガキが四人できるまで待つてみな、俺みてえに。そうすりゃ、おめえ、確かに古くせえが、一人あたり四ペンスでダナムに連れて行けりゃ、そんだけで御おんの字だつて、そう思うぜ」

「それでも、俺はオールダリーに行くからな。ガキどもなんぞに煩わされてたまるもんかつてんだ。家にじつとさせときゃええんじゃ」

この最後の言葉が発せられるや、男の目には見えない二つの手がにゅつと現れ、その手の持ち主がふざけた態度ながらも非常に猛烈に、男の横つ面をひっぱいた。隣人たちは、この目に見える敵からの攻撃に尻毛を抜かれてしまった男の顔を見て、全員どつと笑った。そこで、男と今まで話をしてきた相手の男が叫ん

だ——

「ごまあみろってんだ。ねえ、スレイターの奥さん。奴はまだ何も分かつちやねえんだ。奴も赤ん坊ができりや、聖霊降臨祭（こさ）に家に置いとくなんて、俺みてえに気が進まんじやろうに。もう少しばかり長生きしてみなよ。そうすりゃ、奴がダナム公園で両腕に双子を抱え、もう一組の双子が奴の上着の裾をつかんどる、そんな姿を見るってことになるぞ、きつと。奥さん、お前さんの分の子供たちも忘れちやいかんがね」

この瞬間、我らが友のリビーが窓辺に姿を見せたので、泡を食った旦那に取って代わっていたスレイターの奥さんが、大きな声で叫んだ——

「エリザベス・マーシュ、お前さん、デイクソンさんたちと一緒に、どこへ行くんかね？」

「デイクソンさんたちはまだ起きてません。御主人が昨晚おっしゃってましたが、祭日はベッドで寝て過ごすんだそうです。あたしは古くせえ場所のダナムへ行きますよ」

「暗い顔して、まさか独りで行くんじゃないだろうね！」

「いいえ。マーガレット・ホールさんと息子さんが一緒ですよ」と、リビーは答えると、あわてて窓から引つ込んだ。それは彼女が行楽の日のために選んだ仲間——近所のガミガミ女と長患いで虚弱な息子——について何やかやと言われるのを避けるため

あった。

しかし、ジュピターがもたらした平和と幸福を考えると、少なくとも三人の人間にとつて、この鳥はハトに、鳥籠に巻きついたツタの葉っぱはオリヴの小枝（こせ）に思えたかもしれない。というのは、もちろん、誰がフランク・ホール君に聖ヴァレンタインの贈り物をしたのかについては、いつまでも謎のままにしておけなかったし、息子に新しい喜びを与えてくれた人に対して、母親がいつまでも厳しい態度をとり続けることはできなかったからである。ホール夫人は用心深かったし、プライドも高かったので、感謝の念を表したいという自然な気持ちとしばらく闘っていた。だが、ある夕方のこと、リビーが自分の体の半分もあろうかと思える針仕事の荷物を背負って家路に就き、熱くなった道路に沿って足を引きずりながら歩いていると、マーガレット・ホールに追いつかれ、背後から荷物をそつと引き上げられたので、家路が短くなったような気がした。また、マーガレットが感謝の気持ちを心の底から表したので、彼女の疲れはてた心も慰められて明るくなった。なぜなら、打ち解けなさという障壁がひとたび崩壊すると、のべつ幕なしにマーガレットがしゃべり始めたからである。彼女は息子に楽しくて嬉しい仕事を毎日のように与えてくれたリビーに感謝したかったし、息子の感謝の念も伝えたかったし、自分が抱えている希望と不安——彼女の日常生活を構成して

いる様々な希望と不安——について語りたかったのだ。その時からリビーは、脆弱な小型の帆船（二八）のような我が子に自分の全部をあえて積載した母親に対する関心のあまり、このガミガミ女への恐怖を感じなくなつてしまつた。リビーは母親と息子とつて心腹の友となり、悲しい日々を送る少年をなだめるための計画をいろいろと立てるようになった。そして、その熱意は哀れなマーガレット・ホールの熱意と同じくらいだつたにもかかわらず、より大きな成功を収めた。リビーのおかげで、魅力と興奮に満ちた最後の数ヶ月間、フランク・ホールの命の灯火は少しだけ明るくなつたのである。彼は、ダナムの日帰り旅行に行つてもいいよと言えるほど、体力を回復したようにさえ見えた。それは、リビーが聖霊降臨祭のサプライズとして準備し、彼の母親と一緒に数週間にわたつて金を貯めていた旅行である。

朝の六時にノット・ミル（二九）を出る運河船があつた。今ちようど五時を過ぎたところだ。リビーはそつと静かに外へ出て、向かいの親友たちのところへ行つた。彼らの下宿の扉をノックして、応答を待たずに家の中へ入つた。

フランキーは顔を紅潮させて興奮で震えていた——一つには喜びのあまり、一つにはまだ許されていない何か切なる願いのためであつた。

「あの子はピーターと一緒に連れて行きたくて仕方ないみたい

だよ」と、母親はリビーに言った。それは「この問題はあんたに任せるわ」といった口調だつた。少年は懇願するようにリビーの方を見ていた。

「ピーターもそうしたいんだよ。一つには、ぼくがいないと、ひどく寂しくなつて、一日中ピーピー鳴いちゃうからね。きつと心細いんだ。あいつがここに独り残されるなんて、考えただけでも楽しくなくなっちゃうよ。それからね、リビー、いかにもキリスト教徒らしく、花とか緑の葉っぱとか、そんな類のものが大好きなんだ、あいつは。母さんが鳥籠に巻きつけるのに一ペニー分のニオイアラセイトウ（三〇）を買つてくれた時なんか、それはもうチュツチュツチュツって鳴いてたんだよ。あいつは人間みたいに話がしたいんだ。でもね、あいつが言おうとしてることは、ホントにしゃべつてるみたいなのに、ぼくにはよく分かるんだよ。ピーターも行かせて、リビー、お願い。ぼくが自分の腕で抱えて行くからさ」

ということ、ピーターも一行に加わることが許された。

ところで、フランキーを船まで運ぶという大きな難問を克服するため、リビーは「自腹を切つて」（三一）馬車を雇うことを申し出ていた。隣人たちの呼ぶ声や叫ぶ声が聞こえたので、自分たちを運ぶ馬車が路地の奥に用意されていることが彼女たちにも分かつた。身体障害の程度は重いものの、体重は軽いフランキーを

抱えて運んだのは母親であった。彼の方は自分が鳥籠を持つと言つてきかず、そうすることによってピーターのことで誰の迷惑もかけないという約束を果たしていると思つていたようだ。さらに続けて、リビーは弁当の入った包みを馬車の片隅に置き、それが彼の体の支えになるようにしてやった。隣人たちは木で鼻をくくつたような言葉をいろいろとかけたが、幸福を祈る優しい言葉もそれ以上にかけていた。彼らの中には、マーガレットが重そうに抱かえた息子を代わりに運んでやろうと申し出る者も一人、二人いた。しかしながら、彼女はそれを許そうとしなかった。この母親と隣人たちの間に存在し、何日も何日も小さな路地の緊張関係を生み出して怒りの感情は、身体に障害のある少年ポリティックスがいることによつて、すべて忘れ去られてしまったようである。

さて、みんな順調に出発した。フランキーは馬車の揺れで体に走る痛みを我慢しようとしたが、それもやはり無理なようで、じつと唇をかみしめていた。彼が激痛でひるんだり縮み上がったりにしているうちに、マカダム工法で舗装された(三三)公道にやつと出ることができた。彼は目を閉じていたが、数分ほど休憩したがつているようだった。リビーの方は急に引つ込みがちになつた。どうやら、彼女は「偉そうに馬車なんぞに乗つて！」と言われるのを非常に恐れていたようで、片隅に身を隠してできるだけ小さくなつていた。それとは対照的に、ホール夫人はまったく反

対の感情を抱いていた。馬車の中で嬉しそうに立ち上がつて、窓から手を伸ばしたり、歩道に行く人たちに会つたり追い抜いたりする時は、ほとんど全員に会釈していた。そうした人たちの数は相当なものである。天気の良い休暇となつた今週は、こんな早朝でさえ、あちこちの鉄道駅に向かう一行や、運河を埋めつくしている船へ向かう一行で、道路は実になぎやかだった。途中で出会つた人々はほとんど全員、ホール夫人の浮き浮きした気持ちに共鳴しているように見え、微笑や会釈を投げ返していた。やつとこのことで、彼女はリビーのそばにドシンと座り、「馬車なんか、今までに一回しか乗つたことないんじゃないよ。それはねえ、結婚式に行く時じゃつた」と声を大にして言つた。そして、馬車の内装に感心しながら、「まるで天国みてえじゃ。しかも、こんな美しい笹縁ギンブ(三三)で、すっかり改装されて！」と続けて言つた。

休暇、素晴らしい天気、「甘美な早朝」(三四)が人を元気にする力を持つているかのように(間違ひなく持つているのだが)、それらの影響下で全員の心が可哀想なフランキーに対して和らいでいるようだった。馬車の御者は力強い腕で優しく彼を抱き上げ、慎重に下の船のところまで運んでくれた。すると、船に乗つていた人たちが場所を空けて、彼に一番よい席を与えてくれた。いや、それは一番よい席というよりは、寝椅子と呼んだ方がよい。というのも、みんなは彼が疲れていると分かるや、横になる

べきだと言いつ張つたからである。とはいへ、そんな姿勢になることは、幾つかの籠と一緒にピーターを運びながら、やっと現れた母親とリビーの世話にならなければ、彼には恥ずかしくてできなかったであろう。

船が岸を離れると、そのあとへ他の船がたくさん入ってきた。なぜなら、聖霊降臨祭の週には、田舎の魅力を楽しむ機会を疲弊した大衆に与えるためであろうか、陸路と水路の両方の乗り物の需要がとて高まるからである。運河を走る小さな定期船は立ち席でさえ全部いっぱいだ。定期船がスーッと進んで行くと、運河の土手に人垣ができた。彼らは、船がそばを通るとき、それを見ることが目的としているのである。船には、今日の行楽のことで期待に満ちた顔をした幸せそうな人々が、立錐の余地もなく詰め込まれていた。船が通り抜けて行く田舎が非常に退屈であることは想像にかたくないが、それでも田舎は田舎。子供たちの楽しそうな金切り声、親たちの嬉しそうな低い声（どこかの田舎屋の壁に花や葉っぱをなびかせる満開の木とか、運河の土手に沿って涼しげな草の深みで咲いている春の名残りのサクラソウの茂みとかを見ての笑い声）、この楽しい一日を十分に味わうことなく終わらせるなんて考えただけでもゾツとするかのように、あらゆるものを完全に楽しんでいる声——これらの声を聞いてみると、マンチェスターから八マイルしか離れていない場所まで到着す

るのに二時間を要したにもかかわらず、その二時間が途方もなく短いように思えた。フランキーでさえ、（両方とも金で舗装されている^(三)）と違って、どうやらロンドンと混同していたらしい）ダナムの森を見たくてたまらないようであった。いろんな景色が目の前を流れて行ったが、彼は船が軽やかに進む時のゆつたりした揺れをとて楽しんでいた。そのためか、柔らかな緑の牧草地——運河の波が揺れながら打ち寄せる岸まで傾斜していた牧草地——に下船する時になると、実に残念そうな様子だった。仲間の乗客たちは彼を公園まで運んでくれた。この奉仕に対する報酬として、彼の母親はわざわざ六ペンスを取っておいたのだが、お金の受け取りは拒否されてしまった。

「ああ、リビー、なんて美しいんだ！ ああ、母さん、母さん！ マンチェスターの外の世界って、こんなに美しかったの？ 樹木がこんなだとは思わなかったよ、ぼく！ 鳥たちにとつて、なんて青々とした家なんだろう！ 見てごらん、ピーター！ あの上の大枝のところへ飛んで行きたくないかい？ でも、行かせないよ。だって、お前はぼくの友だちなんだから。お前がいなくなると、まったく困っちゃうよ」

みんなはブナの木の間根もとの苔むした綺麗な芝土の上にショールを広げた。それは自然から作った寝椅子のように見えた。嬉しさのあまり彼はどんな激しい運動でもできると思っていたようだ

が、みんなは彼をそこに寝かせ、休息しなさいと言った。彼が横になった——いつもジュピターの鳥籠を抱きかかえ、まるで遊び仲間であるかのように、たびたび話しかけていた——場所は、堂々とした樹木に囲まれた緑地帯の端っこにあった。そこは、新緑が夏の熱気で濃くなって深みのある単調な同一色になる前だったので、まだ初々しい葉っぱの美観を呈していた。この場所へ行楽の一行が陸続とやって来ていた。若い男、若い女、年老いた者、幼い者(二六)——家族全員が先頭の父親たちのあとから列をなして歩いている。父親は幼子を腕に抱いたり、背中におんぶしてしたが、この土地については妻と何か他愛もない思い出を共有しているようで、時おり後ろを振り返っていた。ダナム公園は何年にもわたって、マンチェスターの労働者たちにとって、お気に入りの行楽地であったのだ。何年か分らないほど昔からそうであった。おそらく例の公爵(二七)が自分の運河を使って安い旅のシステムを確立して以来ずっとであろう。マンチェスターの慌ただしさと喧騒と完全に対照をなし、太古からの（ところどころ雷に打たれて白くなっている）樹木で申し分のない森林地となっている公園の景色。公園の「緑の草木でできた壁」。(二八)どこか遠く離れた林間の空き地に通じている公園の草深い散歩道——前年に生えたシダ類の間でカサカサと音を立てるウサギにハツとしたり、モリバトの鳴き声が公園と調和した唯一ふさわしい音に思え

るような散歩道。確かに、この完璧な森林地の深閑さ、この手軽に経験できる静寂、（田舎の象徴である緑樹の形で人間の魂を包みこんでいる）これこそが都会ともっとも完全なコントラストをなし、結果的に都会の人間を魅了する最大の力を持つことになるのだ。

ほどなくリビーはひどい空腹を覚えた。とはいえ、彼らは弁当しか用意していなかった。もちろん、それはできるだけ十二時近くになって食べなければならぬ。それで、マーガレット・ホルは気転をきかせ、近くにいた労働者に、いま何時か教えてくれるように頼んだ。

「いやいや」と男は答えた。「今日は時計なんぞ見やしねえ。時の経つのがいやに速いじゃねえかと思って、楽しみをぶちこわしたかねえからな。お前さん、腹が減ってんなら、さっさと食べまいな。自分の弁当を食べる時間ぐれえ、自分で決めらあ。もつとも、俺の分は一時間も前に食っちゃったけどよ」

ということ、彼らは仔牛の肉パイを食べてから、まだ十時半を少し過ぎたぐらいであることに気づいた。その日の午前中はそれほど楽しい催し物が多かったのである。しかし、彼らはいつまでも思い悩んだりしない性格だったので、むしろ自分たちの間違いを面白がって、九時頃に弁当を食べてしまった男のことを一緒に笑っていた。実は、笑われた男が一番うんと笑っていた

のだが、突如として笑うのをやめて、こう言った――

「おっと、こんな調子で笑い続けてちゃいけない。笑うとまた腹が減っちゃうからな」

「ああ！ そんなだけのことなら」と、ある陽気な顔をした男が言った。この男は全身を伸ばして寝そべり、草をサツとなでて新鮮な香りをかいでいた。そのそばでは、さながら親にじゃれつく子犬や子猫のように、幼い子供たちが転げまわったり、這いまわったりしている。「そんなだけのことなら、弁当を朝飯の代わりに食っちゃった、そんな後先かまわん連中のために、ここは一つ、食べ物も寄付してやろうじゃねえか。ここに俺の分としてソーセージの練り物と木の実が一握りあるぞ。おい、ボブ、帽子を持ってぐるぐる回ってやりな。仲間の連中が何を出すか、見てみようじゃねえか」

この冗談をボブが実行に移したので、フランキー君はとても面白がっていた。集まったのはペーミン・ドロップから仔牛の肉パイやソーセージの練り物まで多種にわたったが、寄付を拒むようなみみ、つちい男は一人としていなかった。

「商売大繁盛だ！」とボブは言いながら、帽子いっぱいの食べ物をリビーのそばの草の上におちつけた。「しかも、みんなのスネをかじるってのは、最高の気分じゃね。シッ！ 何じゃね、ありゃ？」

おしゃべりと笑い声が突然ストップし、母親たちが子供たちに耳を澄ませてごらんと言った。遠く離れたところで、時には低くて小さく、時にははつきりと強く、響き渡るような子供たちの声が、私たちすべてが慣れ親しんだ讚美歌の旋律と混ざり合って聞こえてきた。それは、私たちが何でも不思議がる子供だった頃に、完全無欠な崇拜の対象である神のもとへ召されてしまった最愛の人たちによって、「我らが父」を崇拜するために初めて教会へ連れられて行った、遠い、遠い昔を思い出させるような讚美歌の旋律であった。遠くで聞こえる合唱の讚美歌は、もつとも思慮を欠いた人間にとつてさえ、神聖なものに思えた。実際に、その讚美歌が終わると、また旋律が聞こえるのではないかと、しばらくの間みんな耳をそばだてていた。その間ずっと、素晴らしい天気の日に死ぬほど踊りまくる無数の昆虫たちの、真昼にブンブンと飛びまわる音が聞こえていた。心地よいが抵抗できない微風を受けて巨大な森が揺れる音も聞こえた。それから、子供たちの楽しそうな冗談や叫び声やまた急に沸き起り、年長者たちは「緑樹の木陰に」^(三)を横になつたり座つたりしながら、楽しい話を再開した。新たに行楽の一行が次々と立ち寄って行ったが、野花――実際にはほとんどサンザシの枝――をたくさん抱えたグループもいれば、咲き始めのヨーロッパノイバラ^(三)を摘み取って、この垣根の麗人がナデシコやハコベやセンノウの中に潜んだり隠

れたりしないように、そうした同類の植物を捨てて行くグループもいた。

このような一行がフランキーの近くにやつて来て、もらった花を横になって仕分けしている彼の姿を興味深そうに眺めていた。健康と美に恵まれた幸せそうな親たちは、うるさい音楽隊のような子供たちに囲まれて、フランキーのそばに立っていたが、しなびた手足、やせ細った指、そして鮮やかだが暗い輝きを放つランブのような目が悲しくも予言していることを感じ取っていた。彼の母親は嬉しそうな我が子の姿を熱心に見つめるあまり、傍観者たちの深刻な表情の意味を読み取れなかったが、リビーははっきりと読み取っていた。こんな日でさえ、彼の将来のことを考えると、彼女の体には悪寒が走った。

「やっぱりねえ！ きつと腰を抜かすだろうって思ってたよ！」
何気なく座って花を仕分けし、ずっと悲しい物思いに耽っていたリビーは、背中をひどくピシヤリと叩かれて、実際に腰を抜かしてしまった。それはデイクソン夫妻だった。彼らとその子供たちは、ベッドで寝ながら祭日を祝うことなどはせず、起床して、この近場に乗合馬車でやつて来たのだった。マーガレット・ホールとデイクソン夫人との仲違いのために、一瞬、この出会いはバツの悪いものになったけれど、こんな祭日に、しかもこんなに静かな美しい場所で、優しい母なる自然の慰めを長く拒み続けるこ

となどはできなかった。そんな慰めを無視できる人がいたとしても、フランキーの姿を見れば、たちまち畏敬の念に襲われて、腹立たしい気持ちも穏やかなものになったであろう。デイクソン夫妻が最後に会ってから、彼の姿はそれほど変わってしまったのである。かつてのフランキーは近所で妖精バックとかロビン・グッドフェローとか(三)呼ばれていた。彼のビー玉はいつも大人の足もとに転がってきたし、こま独楽の紐は不注意な人間をひっかけようと輪っかの形でいつも吊り下げられていた。そうだ、今では弱々しく、穏和で、ほとんど女の子のように見える少年が、幸せで快活な腕白小僧だった頃もかつてはあったのである。そんな腕白小僧として、デイクソン夫人——今まさに目に涙を浮かべて、彼を見つめているデイクソン夫人——に、しばしばビンタを喰らっていたのだ。そのような彼女が、衰弱して変わりはてた彼の姿を見て、その母親と喧嘩を続けることなどできるだろうか？

「どの位ここにはいるんかね？」とデイクソンが尋ねた。
「ほとんど一日中です」とリビーは答えた。

「シカとか超キック・アンド・クイーン級のカシの木とか、見に行かんかったんかね？ うわあ、馬鹿だな——」

妻が彼の腕をつねって、どうすることもできないフランキーの体の状態を思い出させた。もちろん、そんな状態でなければ、行きたくて仕方ない彼の足をつなぎ止めることなどはできなかった

だろう。とはいえ、ディクソンには窮余の策があった。彼はボブの他に男を二、三人ほど呼んで、それぞれに格子縞の強いシヨールの角を持たせ、まるでハンモックに乗せたみたいに、みんなでフランキーを吊り下げさせた。こうして、彼を森の小道に沿って運び、なめらかで草の多い芝土を越えて行くと、上を向いた彼の顔に光と影がちらちらと射した。その後ろから、女たちはおしゃべりをしたり、道草を食ったりしながら、ハンモックを見失わないように歩いていった。時には地面から何か緑の宝物を摘んだり、時にはウマガリの低くたれた枝に手を伸ばしたりした。この祭日に、この森で、まったく知らず知らずのうちに、みんなの心は大きくなっていた。人間の心とは実際にそんなものである。みんな、フランキーのハンモックを運ぶ男たちのあとに続いて、草の深い塚を登った。頂上には松林があつて、その幹は太陽光線を受けて紅くれなゐに染まった黄金のように見えた。彼らはフランキーをそこに連れてきて、遠く離れた青い平原に横たわるマンチェスターと、それを背景にして前景の森林地が穏やかな、くっきりした線で横切る景色とを見せてやった。この平たい草原の遠く、遠く離れたところでは、大都市の上になれこめて微動だにしない、雲のような煙が見えるかもしれない。それがマンチェスター——醜くて、すすけたマンチェスター、せつせと、真面目に、気高い労働に勤しむ親愛なるマンチェスター——である。子供たちはそこで

生まれ、おそらく何人かはそこで死んで埋葬されている。彼らの家はそのにあつたし、彼らの人生はそこに運命づけられ、彼らはそこで働いて運命をまっ全うするように命じられているのだ。

「ヤッホー！ スモーク・ジャック 焼き串まわしさん（三三）」とボブは叫んでから、フランキーを草の上にそつと下ろし、大声をあげる前に帽子をぐるぐると回した。全員から「ヤッホー、ヤッホー」の叫び声。「おいらの帽子の縁が、輪投げの輪つか（三三）みてえに、あんな場所まで飛んでつてらあ！」ボブは静かにそう言いながら、裁判官のような真面目くさつた顔をして、縁のない帽子をまた自分の頭にかぶせた。

「日曜学校（三四）の子供たちが、丸パンとミルクの弁当を食べに、こっちの木陰にやって来たぞ。シッ！ どうやら幼児学校（三五）の食前の祈りをやつとるみてえだ」

子供たちはすぐ近くに座つたので、彼らの食前の祈りの歌詞がフランキーにも聞こえた。子供たちは、今週の休暇のために派手な夏のプリント地の新しい服を着せてもらい、この緑の丘の斜面で車座になっていたの、幸せそうな明るい小顔で作られた花飾りの輪のように見えた。「ちびドット」と呼ばれていた小さな女の子が一人、ずつとフランキーを見ていたようで、恥ずかしそうに彼の背後にやって来て、自分の半割の丸パンをそばに投げてから走り去った。そして、そんな優しい衝動に駆られた自分自身の大胆さ

がとても恥ずかしかつたのだろうか、姿を隠してしまった。隠れた場所から、この女の子はずっとフランキーをちらちらと見ていたが、見られている彼の方は喜びと幸せに圧倒され、ほとんど食べ物に手がつけられなかった。それほど世界は美しく、それほど男も女も大人も子供も優しく親切だったのである。実際、みんな、大地の美しさに心を和らげられ、麗しき大地の創造主である愛の化身に知らず感動させられていたのだ。

しかしながら、一日も終わりに近づいた。暑気は和らぎ、鳥たちは再びさえずり始めた。それに呼応して、万物に生気を回復させる露が降り始めたことを示す馥郁^{ふくよく}たる新鮮な香りが、樹木や草木のあたりに漂っている。そして——とうとう、帰りの船の時刻が近づいてきた。牧草地の小道をてくてく歩いて戻っていると、昼の間に出会った多くのグループと合流した。みんな幸せいっぱいで、今日一日の経験談で持ちきりである。積年の恨みは忘れ去られ、新しい友情が育まれていた。今日一日の間に新たな趣味や高尚な娯楽が彼らに与えられたからであろう。私たちはみんな、何らかの崇高な考えや情け深い思い（この世でもっとも気高いもの）によって、天国に行った時の私たちの顔と似たような表情をよく呼び起こされる。多くの人たちの顔に、そうした表情のきらめきを——「私たちの家となる」^(三六) 天国から射して雲のように浮かんで見える神の栄光のきらめきを——見て取ることができ

る。そんな表情が、ダナムの森を——急速に夜の闇へ溶けこんでいるが、安らぎと美しさのイメージを伴って、いつまでも生々しく新鮮な思い出として多くの織機、仕事場、工場に残り続けるであろうダナムの森を——名残り惜しそうに振り返って見ている大勢の人たちの仕事で疲れたシワだらけの顔に浮かんでいた。

その晩、リビーが眠れぬまま横になって、昼間にあった出来事を思いめぐらしていると、開け放たれた窓を通してフランキーの声が届いてきた。彼は、痛みから生じる例のうめき声をあげることもなく、子供たちが合唱していた讚美歌の折り返し句を思い出そうとしていた——

この世で我らは悲しみと苦しみを受ける

この世で我らは再び別れるために出会う^(三七)

天国では我らが別れることは決してない

ああ！ それは嬉しいことなり……

リビーはその日もっとも幸福だった時に自分にささやかれた彼の質問を思い起こした。「ダナムは天国と似てるかな？ この人たちは天使みたいに親切だね。だったら、天国がここ以上に美しい場所である必要はないよ。君と母さんさえ一緒なら、ぼくは死んでしまつて、ずっとそこに住みたいなあ！」と、彼はリビーに

言ったのである。彼女はフランキーが不敬なことを言っていると
 思い、その発言をさへぎった。しかし、天国が——彼は自分が急
 ぎ足でそこへ向かっていることを自らの英知によって悟っていた
 ——どういう場所なのか、ある一定のことを知りたいという少年
 の願望に、間違ったところは、いや、悲しいところさえ全然な
 かった。なぜならば——

天国では我らが別れることは決してない

のだから。

第三の祭日 ミカエル祭

教会の時計が三時を報じ、早めの昼食を済ませて仕事に戻る紳
 士たちの群れも、事務所や大商店の中に消えてしまっていた。人
 通りがなくなつた街路は水を打つたように静かで、御婦人たちが
 午後の買い物や訪問にさつそうと出かけようとしていた。

小さな葬列がゆつくりと、ゆつくりと街路に沿って、曲がり角
 に来るたびに人間どもから肘で押しつけられながら、くねくねと
 進んでいる。四人の男たちが子供の棺桶を運び、そのあとから二
 人の女が頭こゝろをたれて、おとなしく歩いている。

それが誰の棺桶なのか、その二人の会葬者が誰なのか、ここで
 述べる必要はあるまい。フランク・ホール君については、すべて
 が今や終わってしまった。彼のたわむれ、おどけ、病氣、苦し
 み、そして死。復活と生命三六を除いて、すべてが今や終わつ
 たのである。彼の母親は茫然自失の体ていで歩いている。彼が死ん
 だなどということがあるだろうか！ 彼女の思考の対象が彼で
 なかつたなら、彼女の重労働の動機が彼のためでなかつたなら、
 もっと早く彼の死を理解できていただろう。しかし、実際そうで
 はなかつたので、彼女はまるで何か重苦しい悪夢に駆られている
 かのように、可哀想に見放された息子のやせさらばえた亡骸なきがらにつ
 いて行つた。息子が本当に死んだのなら、どうしてまだ生き続け
 ることなどできようか？

マーガレット・ホールに比べれば、リビーの頭はそれほど呆然
 としていたわけではない。どちらかと言えば、かなり活発に働い
 ていた。いろんな光景が、さながら魔術幻灯ファンタズティック灯三九のように、リ
 ビーの目の前を素早く通りすぎて行つた。その光景というのは次
 のような記憶からなるものである。今ではかなり昔のことに思え
 るが、弱々しく振られる腕の影が最初に彼女の注意を引いた時の
 記憶。世界が喜びと美と生命に溢れて見えるダナム公園で過ごし
 た快晴の特別な祭日についての記憶。午後の熱い太陽光線から逃
 れることのできない小さな風通しの悪い部屋で、可哀想にフラン

キーがハーハーと息をしながら体力を失っていた長い暑中期間についての記憶。寝ても覚めても常にうめき声をあげている彼のそばで、母親とリビーが寝ずに看護をしていた長い夜についての記憶。苦痛から生じる苛立ち——彼自身の目から見た場合の苛立ちにすぎず、他人から見ると正真正銘の神々しい忍耐強さ——に対する彼の憐れむべき自責の念についての記憶。それから、生命力が衰え、体力が消失し、ますます意識が遠ざかり、顔に暗い影が射したのに続いて、天使のように安らかな美しい表情が浮かんだ——彼はどこに行ったのか——今はどうなってしまったのだろうか？

そして、彼が墓に埋葬されると、厳かな^{とむろ}弔いの言葉が聞こえた。その言葉は、会葬者たちに向けられたものではないかのようには、はるか遠く離れた場所で聞こえていた。

マーガレット・ホールは最後の一瞥のために墓の上に身をかがめた。彼女は朝からずっと口をきくことも涙にむせぶこともなく、時々ぶるぶる震えるだけであった。しかしながら、今や彼女の体はリジーの腕に重くのしかかるようになった。そして、ため息や声をあげることなく気を失い、積み上げられた砂利の上にドサツと倒れた。みんなはリビーと一緒に彼女の意識を回復させた。目が半分ほど開いて息づかいが変ったことで、彼女の意識が戻ったことは分かったが、その後ずっと彼女は慣れない砂利

のベッドから起き上がるうともせず、横になったまま口をつぐんで微動だにしなかった。そんな些細な努力をする価値さえ、この世には全然ないと思っているかのようなようだった。

やつとのもつとリビーと彼女は、この聖なる神々しい場所を離れ、さらにもつと神聖な唯一の場所へ向かった。それはフランキーが息を引き取った場所、目に入る安物の粗末な家具の一つ一つに彼の思い出が宿っている場所である。ドアを開くと、下宿の雑役婦がリビーを脇へ引っ張って行った。

「向かいのアン・ディクソンが会いに来なすつたよ。ひと言あなたに話があるそうじゃ」

「今は行けません」とリビーは言いながら、息子を失った母親と一緒に部屋（あの子の）部屋）に入るべく、急いで押しつけて行った。リビーが予期していたように、この誰もいない部屋を——とても長い間すべてが陰気で沈んだ感じになっていた部屋を——見たことで、そして新鮮な空気と人を喜ばせる明るい日光を入れるために開けられてカーテンが引かれた窓をチラッと見たことで、哀れな母親の涙をたたえた泉の堰が切れてしまい、彼女は息子を求めて長く、かん高い叫び声を発した。

「ああ！ ホールさん！」と、リビーは自分自身も涙でしどろに濡れながら言った。「そんなに悲嘆に暮れないでください。もしあの子が生きてたら、とつても悲しみますよ、きつと。それ

に、あの子は実際に生きてますよ——聖書にはそう書かれてい
すから。おそらく、あたしたちがあの子なしでどんなふうによつ
てるかを見守り、あんまり気をもまないようにって願ってること
でしょう」

ホール夫人はますますひどく涙にむせび、ヒステリー状態に
なった。

「ああー 聞いてくださいー」と、リビーはもう一度、いやが
上にも高まる自分の心の動揺と闘いながら言った。「聞いてくだ
さい！ ピーターが、困った時にいつもするように、なんだか怖
がってチュッ、チュッ、チュッと鳴いてますよ。あのカナリヤ
が、あんなかん高い声で、チュッ、チュッ、チュッと鳴くなん
て。死んだ彼が耳にしたら、決して我慢できませんよ」

マーガレット・ホールはなんとか自制し、息子が愛した小さな
鳥を怖がらせないように、苦悶の表情を必死に抑えていた。この
母親の悲しみが少なくとも表面的に静まると、リビーは汲めど尽
させぬ慰めの泉として「ヨハネの福音書」第一四章(四〇)で開い
た状態になっている古い大きな聖書を手にとった。

こうした大きな家庭用の聖書が、この章で実際に幾たび開かれ
てきたことか！ まるで、聖書は喜びや繁栄に満ちている時には
見向きもされないが、人間の魂は、疲労や悲嘆で苦しんでいる時
には、ちやうど幼子が悲しみや心配のある時に母親の優しい慰め

を求めるように、この章に書いてある愛情や同情の言葉を求めて
舞い戻ってくるかのようである。

マーガレット・ホールは涙で濡れた、くしゃくしゃの白髪を
熱っぽい、涙で汚れた憂い顔から掻きあげ、自分の息子が住まい
に行った「父なる神の家」(四二)についての考えを少しまとめよう
とし、とても真剣な目つきで耳を傾けていた。

ここで、扉をノックする低い音にさえぎられたので、リビーが
応対した。

「アン・デイクソンはあんたが帰宅したのに気づいたそうじゃ。
話をしたがとるとるよ」と、下宿の雑役婦がささやき声で言った。
リビーはまた戻って聖書を閉じ、マーガレット・ホールに少し説
明してから、一階に駆け下りた。すると、アンが自分に会いた
がっている理由が分かった。

「ああ、リビー！」と彼女は絶叫したが、すぐにリビーの最後
の厳粛な務めを思い出して、ぐっと感情を抑えた。「マーガレッ
ト・ホールはどう？ もちろん、可哀想なんだけど、やっぱり最
初はちよつとやきもきするわよね。いずれ元気になるさって、母
さんは言つとるわ。あの哀れな少年が召されたのは悪いことじゃ
ないんだから。だって、いつも半身不随で、あの人の足手まとい
だったんですもの——昔は元気な少年だったのね」

アンは別の問題で頭がいっぱいだったが、リビーの悲しそうな

泣き顔と物静かな沈んだ態度を見て、この話し相手の心を完全に奪っているテーマとは別のテーマで話を始めると、これは気まずいことになるなと思った。リビーは彼女の最後の発言に対して、悲しげに答えた――

「間違いない、アン、これは最善を考えての天の配剤なんです。でもね、ああ！ 確かに半身不随だったけど、母親の足手まといだったなんて言わないで。そんなふうになるなんて考えないでちょうだい。彼のために何かしなくちゃならないことがあれば、それだけいつそう彼のことを愛しておられたんですから――あたしだってホントにそうだったのよ」

リビーは前掛けで顔を隠して少し泣いていた。アン・ディクソンは意見が一致しない話題を持ち出して、さらにいつそう気まずい思いをした。

「そうね。『人は草なり』(四三)って、聖書にはそう書いてあるわね」と彼女は言った。この世にある万物のはかない性質について教訓的な話をするつもりはなかったにせよ、できることなら聖句を引用することで礼儀を果たそうとしていた彼女は、これで自分の本来の用向きに話題を移してもよからうと思った。

「リビー・マーシュ、あんたまでずっと落ち込んでちゃ駄目よ。今日の午後、あなたに会いにきたのはね、明日は結婚式に来てくれなくちゃって、言いたかったからなの。ナニー・ドーンソンが病

気になったんで、是が非でもあなたには彼女の代わりに花嫁の付き添い役をやってもらいたいのよ」

「明日ですって！ ああ、駄目よ――絶対に駄目！」

「どうして駄目なの？」

リビーが返事をしなかったので、アン・ディクソンはいらいらした。

「よもや、神の名において、あなた、その死んじやった半身不随のために、あたら一日の楽しみを逃すつもりじゃないわよね！」

「ええ――それは逃すべきもんじゃないわね――お願いだから彼のことと腹を立てないで、アン・ディクソン。あたしには楽しみになるなんて思えないの――楽しめるような気がしないのよ。でもね、ありがとう。あたし、あの子のことがそれはもう大好きだったの――ホントに」と、彼女は涙にむせびながら言った。「彼のことを忘れて、そんなにすぐ楽しくなれないのよ」

「まあ――驚いた！」アンは癩癩玉が破裂したような口調で叫んだ。

「ホントに、アン、あなたは親切よ。あなたとボブが幸せになれますように――そうなるわよ、きつと。でもね、たとえ結婚式に行っただとしても、あたし、一日中ずっと彼と可哀想な彼の母さんのことを考えるでしょう。結婚式の時に死んだ人のことばっか

り考えるのつて、縁起が悪いって言うしね」

「馬鹿らしい！」とアンは答えた。「あたし、縁起が悪いことなんか、痛くも痒くもないわ。結局のところ、結婚するつてどういうことなの？ 単なる空騒ぎだつて、ボブは言つとるわ。あたしはいい奥さんになれんだろうつてのが彼の口癖よ。だつて、工場で働いてばかりいたんだから、あたし、家事のことなんかチンプンカンプンなもの。でもね、他の誰かさんと気楽にやるよりか、あたしと一緒に落ち着かない方が、彼にとつてはいいんだつて。愛なんてそんなもんよ！ あたしだつて、他の誰かさんとしらふでいるよりか、彼をへべれけにしておいた方がいいわ」

「まあ！ アン・デイクソン、口を慎んで！ 酒飲みの夫を持つつてのがどんなことなのか、あなたにはまだ分からないのよ。あたしには経験が多少あるの。父さんはよくぐでんぐでんに酔つてたし、結局それが原因で、放つたらかきにされた母さんは死んじゃつたの。ああ！ アン、酔つ払いの男と結婚した妻が、どんな忍耐を強いられるか、神様にしか分からないのよ。人には言わないでね——」と、リビーは声を低くして言った。「あのね、いつものように飲んで暴れてる最中に、父さんは赤ちゃんを殺してしまつたの。それからというもの、母さんは二度と再び顔を上げなかつたわ。そのことでは父さんも同じなんだけど、ただ、父さんの場合は母さんとは違つてたの。(四三)今はもう母さんもジェ

ミーちゃんのところに行つて、二人とも一緒に幸せに暮らしてることでしょう——それから、たぶんフランキーもね。ああ！」と、彼女は何を考へていたのか思い出して言つた。「だから、夫が酒びたりになつて妻の運命について、そんな軽々しいことは絶対に言わないでちょうだい！」

「まあ、なんてお説教なの！ あのね、リビー、あんたつて人は今まで見たこともない、生まれながらのオールドミスだわ。しらふだろうが、へべれけだろうが、あんたと結婚してくれる男なんかいるもんですか！」

リビーは顔をかなり赤くしたが、温和な表情を失ふことはなかつた。

「そんなことは言われなくても分かつてるわ。神様は、女に与えられた当然の仕事を、あたしにさせないことが適当だと思われただから、あたしはなおさら自分で仕事を見つけるように努力しなけりゃいけないの。つまりね」と言つてから、リビーはアン・デイクソンの当惑した顔を見た。「自分自身の家庭、すべてをきちんとするように妻に期待するような夫、看護や世話をしなきゃいけない子供たち、女に与えられた当然の仕事だと思つてるもの、そんなものはすべて持てそうにないんだから、結婚のことでいらいらしたり、そわそわして時間を浪費するんじゃないかと思つて、自分のまわりには何か他にすべき仕事がないかしらと思つ

て、探さなきゃいけないの。このような仕事の機会を逃して人
はたくさんいるわ。こうした仕事に臆せず立ち向かい、本気で
オールドミスになろうとする、そんな人はいないわよね。つま
り、オールドミスのような人ができるように、神様は余った仕事
をこの世にちゃんと残しておいてくださってるのに、みんな、
オールドミスのままで、そんな仕事を求めたりしないんです。そ
んなことはせずに、決して自分自身のものになりそうにないこと
に憧れてるのよ。余った仕事はたくさんあって、それをする人た
ちには神様の祝福があるんですけどね」

このように、彼女は長い間ずっと心の中で考えていたことを吐
露したので、もう少しで息が切れそうになった。

「オールドミスになりそうな人にとって、それは真実だわ、間
違いなく。でも、あたしはそうじゃないからね。神様の思し召し
で明日になりや、あなたは無駄口を慎めばよかったなって、そう
思うでしょうよ。あたしが知りたいのはね、明日あなたが花嫁の
付き添いになってくれるかどうかってことなの。さあさあ、来て
ちょうだい。哀れなフランキー・ホールのために、あんなに働い
て、看病して、奴隷みたいな重労働をしたあとなんだから、あんな
のためになるわよ、絶対にね」

「あれは余った仕事の一つだったのよ」と、リビーは微笑を浮
かべて言ったが、目には涙が溢れていた。「でもね、アン」と、

彼女は落ち着きを取り戻して言った。「明日はそんなことできな
いわ。ホントにできないの」

「もう待てんわ」と、アンはほとんど無愛想とも言える口調で
言った。「あたしとボブは今日から明日へ延期したんよ、葬式の
せいでね。ボブはミカエル祭(四四)の日にしようって決めてたの
に。母さんの話じゃ、ガチヨウの料理は明日までしか持たんそう
よ。頼むから、来てちょうだい。父さんが食べ物を、ボブが飲み
物を用意してくれるんだから、あたしたち、そりゃもう楽しくな
るわよ！ それからね、教会から戻ったあとは、二人一組になっ
て町中を練り歩くことになってんですって。婦人帽には白いサテ
ンのリボンをつけて、気に入った居酒屋はどこだって飲み食いす
るぞって、ボブは言っとるわ。それに、披露宴のあとはダンスが
あるんだって。マーガレット・ホールも洗濯の仕事で外出しな
きゃいけないわよ、きつと」

「そうよ、彼女はウイルクソン夫人の家に行かなきゃならな
いの。そういうことなら、あたしも針仕事に行かなきゃならな
いわ。ウイリアムズ夫人が、娘さんの冬物の準備をするように、せ
きたててらっしゃるの。ただ、あたしはフランキーをあのまま
置いて行けないわ。あたしにすがりついて離れなかつたんですか
らね」

「じゃあ、花嫁の付き添いにはならんのね。最終通告なのね？」

「そうなの。腹を立てないで、アン・デイクソン」と、リビーは済まなそうに言った。

アンは返事もせずに立ち去っていた。

リビーはしょんぼりと小さな階段を昇って行った。しおれているのは、自分が親切な申し出を拒んだことは、それを受け入れることなんか道義的にできないという気持ちかほとんど分からない人にとって、非常に無礼に見えたに違いないと思ったからである。

リビーは部屋のドアを開けると、マーガレット・ホールが目の前のテーブルの上で聖書を開いているのに気づいた。彼女はリビーが読んでいた箇所を必死に理解しようと頭を絞っていたようだ。行の下に指を置いて、それぞれの単語の音節をつなぎ合わせるながら、慰めとなる言葉を一語一語ゆっくりと大きな声で読んでいた。真剣に理解したいという彼女の気持ちは、初めて読み書きを習う時の子供のものであった。リビーは彼女のそばの腰掛けに座った。だが、ほどなくマーガレットは誰かが部屋に来ていたことに気づき、次のように尋ねた。

「あの人、あなたに何の用があったんかね？ 大体の察しはつくよ。今週予定されとる結婚式に出てもらいたかったんじゃろう。そうかそうか、結婚して、笑って、ダンスをするんじゃね。あたしの息子がまだ生きとるみたいにな、みんな一緒にやるがいい

さ」と、彼女は苦々しげに言った。「まあいいさ、あの子はあなたの親類縁者じゃないんだし。じゃから、あの子のためにしてくれたことに、あたしは感謝せんといけんね。あの子が墓に入って落ち着く間もなく、あなたが忘れちまっても、驚きゃせんよ」

「彼を忘れることなんてできませんし、結婚式にも行きはしませんわ」と、リビーは静かに言った。死んだ息子が自分の心を独占していることに対する母親の嫉妬に気づいていたからである。

「明日はウイリアムズ夫人の家で針仕事をしなくちゃなりません」と、リビーは説明するように言った。彼女は優しさと情け深さから生じる悲傷の思いを——アンの招待を断った主たる動機である哀傷の思いを——得意そうに話していると思われなくなかった。

「あたしも洗濯に行かなきゃならんのじゃ、何事もなかったようにね」と、ホール夫人はため息をつきながら言った。「夜になつて帰宅しても、昔だったら階段を上がる前から、あの子の声が必要聞こえとつたのに、今じゃひっそりして空っぽの部屋を見なきゃいけないのじゃ。誰もあたしのことなんか、母さんって二度と呼んでくれやせん」

倒れて泣いている彼女の姿は哀れを誘った。しばらくリビーも自分自身の悲嘆のために口がきけなかった。しかし、この沈黙の間に、彼女はここ何日間も築いてきた思考のアーチの頂上に要石

を置いて、意を決した。それで、マーガレットの悲しみが再び静まると、リビーは「ホールさん、できれば、あたしを——あたしをここに来させ、一緒に住ませてくれませんか？」と言った。

視線を上げたマーガレット・ホールの顔が急に輝いたので、リビーは勢いづいて話を続けた。

「そうすれば、あなたと一緒に寝起きできるし、支払いも半分で済みますよ。夕方も一緒に過ごせますし、先に帰宅した方がもう一方の帰りを待たないわけです。それに——」（ここで声を落としながら）「夜になれば、あの子のことを一緒に話せますよ」
このように彼女は話を続けていたが、ホール夫人が話をささぎった。

「まあ、リビー・マーシュ！ あたしと一緒に住もうなんて本気で考えとるの？ あたしだってそうしたいよ、何はさてお——いやいや、駄目じゃ！ そんなことをしちゃいけん。時たま、あたしがどんな人間になるか、あなたにや何も分かつたらんのだ。腹を立てた時は気が狂っちゃい、抑えられんようになっちゃうんじゃよ。朝は寝起きも虫の居所も悪いから、最初に会った人に癩癩を破裂させずにやおれんのだ。だってね、リビー」と、彼女は悲しげな苦悶の表情を顔に浮かべて言った。「息子は可哀想に病氣じゃったのに、あの子にさえ急に八つ当たりしてたんじゃからね。それだけでも、あたしの癩癩がどんなに手に負えんか、判

断できるじゃろうが。駄目じゃ、来ちゃいけん。これからは、あたし、独りで生きて行かなきゃ」と言った彼女の声は、低い絶望の口調になっていた。

しかしながら、リビーの決心は立派なもので揺らぐことがなかった。「あたし、怖くありませんわ」と、彼女は笑みを浮かべて言った。「あなた以上にあなた自身のことがよく分かっていますから、ホールさん。最近、はらわたが煮えくり返っている時に、あなたが感情を抑えようとなさっているのを見たことがありますもの。今後もずっとそうしてくださいませよ、きつと。とにかく、発作が起こった時も、あなたは親切でしたから、たとえ少しくらい腹を立てたって、そんなことは水に流せますわ。あたしも腹を立てさせないように努力しますからね。ですから、ここに来させてください。あの子だって、あたしたちには協調してもらいたくはないです。あなたを快適にするように最善を尽くしますから、お願いです」

「問題はあたしなんじゃ！ 問題はあたしで、きつと向かつ腹を立てて、あなたの生活をみじめなものにしちまうわ。でなかりや、神様だけが御存じじゃが、あなたにくつついて絶対に離れやせんわ。あなたとあたしは世間でも他に類を見ない人間に違いねえ。だって、死んじまって他に愛してくれる者が誰もおらん人間を、二人とも愛しとったんじゃから。あたしと一緒に住んでく

れるんなら、リビー、あたしも穏やかな気質の優しい人間になるよう、これまで以上に努力するからね。ああ！ リビー・マーシユ、あたしを試してくれるかね？」

このように、小さな墓から希望と決意の泉が湧き出て、二人にとって生きることが共通の目標となったのである。

* * * * *

次の日の夕方、エリザベス・マーシユが一日の仕事から帰宅すると、花嫁衣装にすっぽり身を包んだ（もうデイクソンという姓ではない）アンが、父親の家で催されるダンスに参加するように彼女を説得しようと、路地の向かい側からやって来た。

「まあ、アン、今晚もあたしのことを考えてくれるなんて、ホントに親切ね」とリビーは言いながら、彼女にキスをした。「あたしは行けないけど——一緒にいてあげるってホールさんに約束しちゃったの——あなたのこと、ずっと考えてるからね。絶対、あなたは幸せになれるわ。実は、あなたのために選んだんだけど、小さな針箱があるのよ。ちょっと待ってね——はい、どうぞ。こんなもんで御免なさい——でも——」

「でも何？ 分かっているわよ。いい物を可哀想なフランキーに買ってやるのに、あんた、有り金すべて使ったもんね。ホント

にいい人ね、あんたって、リビー。この本型の針刺し、死ぬまでずっと大切にするわね。きつと、そうするわ」

こんなに友だち思いのアンを見て勇気が出たリビーは、自分の住まいが変わったこと、すなわち、今後はマーガレット・ホールと一緒に下宿するつもりであることを伝えた。

「そんなことしちゃ、絶対に駄目！ だって、父さんも母さんも、あんたのこと、それはもう大好きなんよ。ホントの事情が家賃のことなら、下げてくれるわよ——だからと言って、飲食物をケチることなんかしないってことは知ってるでしょ。それに、よりによってマーガレット・ホールと一緒に下宿するなんて！

あの人はタートル人^(四五)のような女よ！ 喧嘩の相手がいないけりゃ、自分の右手を左手と闘わせるくらいなのよ。あんたの生活は安らぎなんてなくなっちゃうわ。一体全体、なぜ、そんなこと考えたの、リビー・マーシユ？」

「あたしがいないと、あの人は独りぼっちになるの」と、リビーは諭すように言った。「時たま、少しぐらい叱られたって、あの人を幸せにすることが出来るわ、きつと——独り暮らしをしている時よりはね。あの人のことは怖くないし、怒らせないように最善を尽くすつもりよ。たぶん、ちよくちよくフランキーのことを話してやれば、あの人の心も和らぐでしょう。あなたの両親にはしよっちゅう会えるし、親切にしていたから、いつも

感謝してゐるわ。でもね、お二人にはあなたやメアリちゃんがいるけど、可哀想なホールさんには誰もいないの」

アンは「まあ、驚いた！」と繰り返して言うだけで、このニュースを伝えるに急いで帰宅してしまつた。

しかしながら、リビーの言つたことは正しかった。マーガレット・ホールは人間の罪を浄化する悲しみと愛という二人の天使から心の琴線に触れられて優しくなり、この近隣でガミガミ女と呼ばれていた頃とは別人になつた。そして、彼女がリビー・マーシュに愛情と敬意を示している姿を見るのは、とても楽しいことであつた。リビーの死んだ母親といえども、つい最近まで実に恐ろしげで女らしさがなかつた冷酷無情な洗濯女、マーガレット・ホールほどに彼女を優しく愛してやることはできなかったであろう。リビー自身もまた、以前のような天涯孤独のみなしごでもよその、でもなくなつた。フランキーの母親に娘として奉仕するとき、彼女の顔は安らぎの光で輝いて見え、それはもう美人の顔と言えるほどであつた。

* * * * *

読者の皆さんは、物語の教訓めいた最後の一文を、いつも読まれるだろうか？ 私は決して読まないが、かつて（一八一一年

だつたと思うが）そんな一文を読むという独り暮らしの耳の悪い老婆の話聞いたことがある。その人好きのする風変わりな習慣を彼女は子孫たちに残したかもしれないので、彼らのために、私はリビーが心の安らぎを感じた秘訣のようなもの、すなわち、もはや彼女が天涯孤独であることに意気消沈する必要のない本当の理由を付け加えてみよう――

彼女の人生には目的がある。その目的とは神聖なものである。

【訳注】

- (一) マンチェスター中心部のピカデリー・ガーデンの東北東にある小さな通り。
- (二) デイーン通りから東へ十キロほど離れた郊外（現在のランカシャー州アッシュトン・アンダー・ライン）にある通り。
- (三) 摂氏二三・九度から二六・七度ほど。摂氏 (Fahrenheit) の数式は華氏 (Celsius) から三二を引いて九分の五をかける。
- (四) アダムの子孫ノアは、義人ゆえに神から洪水の到来を知らされ、家族と諸種の動物とともに箱船に乗り、破滅を逃れた。「創世記」六～八章を参照。
- (五) コールリッジが中世の魔女物語に取材した斬新な韻律の詩「クリスタベル」（一八一六年）第一部の最終行からの引用。
- (六) ウラギク、ハマシオン、ユウゼンギクなど、ミカエル祭の頃に咲く

植物 (Michael daisies)。

- (七) サトウキビの糖液を発酵させて蒸留を繰り返した酒で、キャプテン・クックが太平洋諸島探検の際に、原住民が飲用しているのを発見した。
- (八) 聖ヴァレンティンは三世紀頃のローマのキリスト教殉教者。彼は親切で優しく、貧乏人や病人を憐れみ、子供たちをかわいがったので、小島までも彼に慣れ親しんだ。老境に入つて子供たちと遊べなくなると、彼らにちよつとした贈り物や愛の短信を送つたと言われる。
- (九) 貧者の一灯。ほんの僅かな捧げ物だが、出す方で犠牲を払っていることが分かるもの。「マルコの福音書」一二章四二―四三節を参照。
- (一〇) ニーシリングに相当する昔の一ギニー金貨は各種の贈り物、謝礼、賞金、公共団体への出金などに用いた。
- (一一) ローマ神話では神々の王で天の支配者である最高の神。雷電を武器とする光・気象現象の神。ギリシャ神話のゼウスにあたる。
- (一二) 手に入らないものの悪口を言つて気休めにする負け惜しみのこと。イソップ物語の「キツネとブドウ」の話を参照。
- (一三) 新約聖書の十二使徒の一人。ペテロは漁夫であったが、イエスの信頼を受けてペテロ (巖の意) の名を与えられた。キリスト受難に際して逃亡するが、のちに回心して伝道にあたり、ネロの迫害を受けて殉教した。
- (一四) マンチェスターの南西にある郊外、オールトリンガム (Altrincham) の西部に広がる森林公園 (別名「デア・パーク (シカ公園)) 。
- (一五) ギヤスケルの故郷ナッツフォードの東にある町、オールダリー・エッジのこと。ジョージ・ギッシングは父の死後この寄宿学校にやられた。町の南西に「ヘア・ヒル (ウサギ丘)」というナシヨナル・ト

ラスト管轄の森林公園がある。

- (一六) 復活祭後の第七日曜日で、スコットランドでは四季支払勘定日 (quarter days) の一つ。原義はホワイト・サンデーで、この日は洗礼が多く行われ、受洗者が白衣を着用したことから生まれた。
- (一七) 両方とも昔から平和の象徴。神の人間に対する怒りが静まって洪水が引いたことを、ノアはオリヴの葉つばをくわえてハトが箱船に戻ってきたことよつて知つた。「創世記」八章一一節を参照。
- (一八) 第一代ダンスダウン男爵ジョージ・グランヴィル (George Granville, 1st Baron Lansdowne, 1666-1735) の悲劇『イギリスの魔法使』(The British Enchanters, or No Magic like Love, 1705) 二幕一場からの引用。
- (一九) マンチェスターの中心を南西に走る大通り、デインズゲイトの南端 (現在のノット・ヒル) 。
- (二〇) 古い土壁の上でよく生育していたことに由来して「壁の花 (wall-flower)」と呼ばれる。花言葉は「逆境にも変わらぬ愛」。
- (二一) ギヤスケルが使用した俗語は「殺害する (slay)」だが、文脈から「支払う (pay)」の意味にしかとれない。
- (二二) マカダム (John Loudon McAdam, 1756-1836) はスコットランドの技術者で、各地の道路建設を指導し、一八二七年に英国政府の道路監督長官に任ぜられた。
- (二三) 洋服や家具などの縁飾りに用いるウール、絹、綿などの打ち紐、組み紐、細幅の織物。
- (二四) ワーズワスの哲学詩『逍遙』(The Excursion, 1814) 六編八二三行への言及。
- (二五) 一匹の猫のために巨万の富を得て三度もロンドン市長になる半ばは伝説的な人物、ディック・ホイッティントン (Dick Whittington) は、

- 貧しい少年時代に、ロンドンの街路は金が敷きつめられていると聞いて上京する。
- (二六) 「詩篇」一四八章一二節からの引用。
- (二七) 第三代ブリッジウォーター公爵、フランシス・エジャトン (Francis Egerton, 3rd Duke of Bridgewater, 1736-1803) は英国内陸水路の開拓者で、マンチェスター北西の町ワースリー (Worsley) とリヴァプールの間を結ぶブリッジウォーター運河を建設した主宰者。
- (二八) 夜鶯の歌に誘われて森の中に分け入り、美の陶酔のうちに忘却を求める真情について披瀝するキーツの「夜鶯に寄す」(“Ode to a Nightingale,” 1819) 四〇行への言及。
- (二九) シェイクスピアの『お気に召すまま』二幕五場一行からの引用。ハーディに同名の田園恋愛小説(一八七二年)がある。
- (三〇) 花が大きく、色は白またはピンクで、生け垣に仕立てたり、接ぎ木の台木に使われる。
- (三一) 十六〜十七世紀に山野に出没した伝説上のいたずらな妖精で、アーデンの森を舞台にしたシェイクスピアの『お気に召すまま』にも登場する。ロビン・グッドフェローやホブゴブリン (Hobgoblin) の名でも呼ばれる。
- (三二) 台所の煙突内に取りつけて、その上昇気流によって風車が回転して下の焼き串を回す装置。「焼き串まわしさん (oud smoke-jack)」とは工場の煙なしには機能しないマンチェスターの愛称。
- (三三) 輪投げは土中に立てた鉄棒を的にして輪を投げ入れる遊戯。
- (三四) 一七八〇年にロバート・レイクス (Robert Raikes) がグロスター州で開いたものに始まる。通例、毎日曜日に児童を対象として、聖書や信仰について学び、礼拝を行うために教会が開く学校。
- (三五) 五〜七歳の児童を収容する義務教育の公立学校。
- (三六) ワースワスの代表作の一つ「靈魂不滅の頌」(“Ode: Intimations of Immortality,” 1807) 六五行からの引用。
- (三七) 幼児学校の支持者であったトマス・ビルビー (Thomas Bilby, 1794-1872) が編纂した子供のための讚美歌からの引用。
- (三八) 「われはよみがえりなり、いのちなり」『ヨハネの福音書』一一章二五節からの引用。
- (三九) 一八〇二年にロンドンで初めて実演された幻灯の仕掛けの一種で、影像が急速に近づいたり遠ざかったり、その他さまざまに変化する。
- (四〇) この章でイエスは聖霊が弟子たちを慰めてくれることを約束する。
- (四一) 「ヨハネの福音書」一四章二節からの引用。
- (四二) 人の命がはかないことを意味する。「イザヤ書」四〇章六節および「ペテロの手紙第二」一章二四節からの引用。
- (四三) 父親は罪悪感のために(天に対して)顔が上げられなかったことを意味する。
- (四四) 大天使ミカエルの祝日。九月二十九日。スコットランドを除く英国では四季支払勘定日の一つ。その日にガチヨウを食べる習慣がある。
- (四五) 主としてイスラム教・シャーマニズムを信奉するロシア領内のトルコ系諸種族の総称。凶暴な人間、手に負えない人、あばずれ女の意で使われる。

【作品の解説】

本邦初訳。三章構成の本短編は一八四七年六月五日、十二日、十九日に「マンチェスターの生活——リビー・マーシュの三つの祭日 (Life in Manchester: Libbie Marsh's Three Eras)」というタイトルで、『週刊誌』『ハウイト・ジャーナル (Howitt's Journal)』に連載された。著者のエリザベス・ギヤスケルは「コットン・マザー・ミルズ (Cotton Mather Mills, Esq.)」という筆名を使ったが、これは一六九二年のセーレム魔女裁判に関する著作 (*The Wonders of the Invisible World*, 1693) で有名なアメリカの会衆派牧師コットン・マザー (Cotton Mather, 1663-1728) と、本短編に登場するマンチェスターの職工たちが働く綿織工場 (cotton mills) とを組合せて考えた筆名であろう。ギヤスケルは、ともに作家で夫婦合作の作品もあるハウイト夫妻 (William Howitt, 1792-1879; Mary Howitt, 1799-1888) と、一八四一年にドイツのライン河沿いのハイデルベルクで同宿して知り合った。その縁で彼女は、夫妻が一八四七年一月一日に創刊した『ハウイト・ジャーナル』に、「リビー・マーシュの三つの祭日」のあと、同年九月に「墓掘り男が見た英雄 (The Sexton's Hero)」を翌年一月に「クリスマス、嵐のち晴れ (Christmas Storms and Sunshine)」を同じ筆名で寄稿した。